

口蹄疫被災農家の1年後の健康と生活実態とそれに伴う必要な支援に関する一考察

キーワード：口蹄疫、被災農家、1年後の健康、1年後の生活実態、支援

福浦善友¹⁾、松本憲子¹⁾、河野義貴¹⁾、壹岐さより¹⁾、小野伊代¹⁾、
河野美恵子¹⁾、原村幸代¹⁾、長友舞¹⁾、原口有紀¹⁾、小野美奈子¹⁾、

1) 宮崎県立看護大学

I. はじめに

A 県 B 地域は畜産が盛んな地域で、基幹産業ともなっている。平成 22 年 4 月中旬に家畜伝染病である口蹄疫が発生し、災害の蔓延を防ぐため、家畜の殺処分、移動制限、消毒の徹底などの対応が行われたが、結果として約 29 万頭もの家畜が殺処分された。私たちは発生当時、県内保健師と共に、被災農家の健康を守る取り組みの一環として電話相談事業に携わった。被災農家の生活状況を聞き取る中で、口蹄疫発生から家畜が殺処分されるまでに 1 か月程度かかった農家もあり、家畜に餌を与えて排泄物を処理する、また、殺処分後は、農場を消毒するという事実を知り、口蹄疫が農家の人々の心身の健康や生活に大きな影響を及ぼす災害であることを痛感してきた。今回、口蹄疫被害地域における地域健康ネットワークと危機管理体制を考える目的で、地域の保健師と共に災害から 1 年経過した被災農家の健康と生活の実態を把握するために家庭訪問をおこなった。訪問記録用紙を元に面接を行うプロセスの中で、被災農家の生の声や生活状況を見聞きし、回復プロセスや癒えない傷があることが見えてきた。そこで、私たちが把握できた細やかな生活実態を元に、被災した農家が抱えている問題と課題を見出して必要な支援について検討したので報告する。

II. 研究目的

口蹄疫被災農家の 1 年後の健康と生活の実態を元に、被災した農家が抱えている問題と課題を見出し必要な支援について考察する。

【口蹄疫とは】口蹄疫は口蹄疫ウイルスによる家畜伝染病で、人への感染はほぼ認められないとされている。接触や空気によって伝播力が強く、人も含め車両や物資の移動が媒体になる可能性が大きい。

III. 研究方法

1. 研究対象

口蹄疫被災農家の住民 169 人のうち研究者 9 人が家庭訪問を行った 119 人から把握した健康と生活実態とした。

2. 研究方法

1) データ収集方法

平成 23 年 8 月の 8 日間、被災農家の 1 年後の生活実態を把握するため、①口蹄疫調査票（フェイスシート）、②抑うつ指標の K6K10 調査票、ユーロ QOL、③口蹄疫発生後から 1 年間の変化／満足度／絆、行政サービスの受け止め／要望、から構成された訪問記録用紙をもとに家庭訪問をおこなう。家庭訪問終了後、訪問記録を終えた後に、再度訪問場面を思い起こし、観察した住民の生活の様子や、住民の言動の中から「生活実態を表している」と思われた場面を記録に残す。

2) 分析方法

- (1) 記録を精読し、一つの意味合いを示す文脈毎に分け、意味内容を読み取りカードに記述する。
- (2) (1) をもとに意味内容の共通性と相異性をもとに類別、カテゴリー化し、口蹄疫被災農家の 1 年後の健康と生活実態を明らかにする。
- (3) (2) をもとに被災した農家が抱えている問題と課題を見出し、必要な支援について考察する。
なお、カテゴリー化するにあたっては、共同研究者間で検討を繰り返し信頼性と妥当性を高めた。

3. 倫理的配慮

研究フィールドとなった自治体には、研究目的と方法、倫理的配慮を記した研究計画を、学長名の公文書と共に送付し、承諾を得た。研究対象である口蹄疫被災地農家に対しては、研究目的、プライバシーの保護、研究協力は自由意志であり、断っても不利益を被らないこと、データ保管方法について明記した文書を提示しながら口頭で説明し、署名にて同意を得た。記述にあたっては個人情報保護されるよう配慮した。

IV. 結果

訪問後の記録から、被災農家の生活実態を示すものとして抽出した文脈は 82 であり、その意味内容を読み取り 82 枚のカードを作成した。この 82 カードを意味内容の共通性と相違性に着目し類別した結果、口蹄疫被災農家の 1 年後の健康と生活の実態は、24 サブカテゴリー、5 カテゴリーに類別できた(表 1)。

以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >、カードから抽出した意味内容は[], 生活実態を示すものとして抽出した文脈は『 』で示す。

分析過程について、カテゴリー【時間的経過と思いの変化】を例に、4つのサブカテゴリー<災害の痛みを心に刻む><災害によってもたらされた新たな気づきと蓄えられた力><被災から 1 年後にも続く整理がつけられない心><1 年後にも残る災害の無念さ>の類別化を説明する。

(1) 災害の痛みを心に刻む

『敷地の入口から見えて後ろに豚舎がある場所に大きな字で「畜魂慰霊碑」と刻んだ石があった』という記述を抽出した。この意味内容は、[敷地の入口から見えて後ろに豚舎がある場所に「畜魂慰霊碑」を設置している]と読み取った。また、『入口には板が打ち付けてあり、そこには、殺処分の連絡が入った日の日付から牛が新たに入った日付、毎月の消毒の日などにちなど、1 年分の経過が書いてあった。また、「牛を殺されると思うとつらかった。忘れてはいけないと思い記録している」と話された』という記述も抽出した。ここから読み取った意味内容は、[口蹄疫発生から当時の殺処分や新しい牛の導入、消毒についての記録を継続することで、災害を忘れてはいけないという気持ちで生活している]であった。

これら 2つの意味内容は、被災農家の災害を忘れてはいけないという強い思いの表れであることから<災害の痛みを心に刻む>というサブカテゴリーとした。

(2) 災害によってもたらされた新たな気づきと蓄えられた力

『「口蹄疫で牛を失ったことで牛の大切さを実感した」「口蹄疫でさまざまな問題にぶつかり、その問題を乗り越える過程で人とのつながりの大切さを実感した」と話していた』という記述から読み取った意味内容は、[口蹄疫で牛の大切さと問題を乗り越える過程で人とのつながりの大切さを実感した]であった。また、『「40 年以上続けた牛の世話ができなくなることは生活に満足感が得られず、友人とのつながりが絶たれ、勧められて再開していた。再開して生活のメリハリにつながった」と話した』との記

述から読み取った意味内容は、[生活の一部となっていた家畜の世話は、生活のリズムと友人とのつながりを作っていた]であった。さらに、『「他の地域で口蹄疫が発生したら手伝いに行きたい。要領が分かっているから。今回の教訓を活かして対応してほしい。できると期待している」と笑顔で話して下さった』の記述の意味内容は、[一年たった今、ほかの地域での災害を想定し、口蹄疫の経験を活かして、他者へも力を差しだし、頑張れる自信と期待がある]、『主人は「牛は、そのふんで植物への飼料を作り出してくれる」と語り、自然とのつながりの中で生活している様子がうかがえた』の記述の意味内容は、[家畜の価値はその排泄物にもあり、自然とのつながりの中で生活している]と読み取った。

これら4つの意味内容は、被災したことによって人間本来の営みに目がむけられたり、様々な気づきや次に向けての力となっていたりしたことから災害によってもたらされた新たな気づきと蓄えられた力>というサブカテゴリーとした。

(3) 被災から1年後にも続く整理がつけられない心

『「発生させてしまったが我が家も被害者…だろ？」と同意を求めるように訪問者を見て返答を待っていた』という記述は、[口蹄疫の加害者でもあり、被害者でもあるという2つの思いがあり、他者の理解を求めている]と読み取り、『「やることが一気になくなってドンと気持ちが落ちている。絵でも初めてみようかとやってみたが気持ちがのらない」とその瞬間は笑顔もなくなり話された』という記述は[畜産を子供に譲ったことにより、趣味を模索しているがまだ気持ちが新たな趣味に向かわない状態]と読み取った。また、『口蹄疫を機に農場を息子へ譲った50代後半のご夫婦。「最中はとにかく忙しくて、その後も地区活動で忙しくて、今ばったりすることがなくなり、今がどうしたらいいかわからない』という記述は、[畜産を再開にあたって、子供へゆずり一線を退いた。今はすることがなくどう過ごしていけばいいかわからなくなった]と読み取った。

これら3つの意味内容は、口蹄疫による被災農家ではあっても加害者でもあり被害者でもあるという両価的なあり方や、現役を退くことを決意し新たな人生を歩もうとしても実際そこに心が向かわず、生活の中で楽しみや生きがいを見つけられないといったあり方であった。そこで、<被災から1年後にも続く整理がつけられない心>というサブカテゴリーとした。

(4) 1年後にも残る災害の無念さ

『「母牛が難産で、獣医を呼びたくてもみんな口蹄疫に出払っていて来てもらえなかった。生まれた仔牛は温かいタオルで拭いてやった。分かっているけど、目の前で死んでいくのを見るのが辛かった』この記述から読み取った意味内容は、[口蹄疫発生当時の母牛の難産は獣医の優先順位が低く、自分で対処するしかなく、母牛仔牛ともに助けられず残念]であった。『「殺処分の日。前もって穴は掘っていたが、いつ殺処分かの連絡はなし。やってきたその日に急に処分になった。セリに出る前の牛が9頭いたし、生後3日目の仔牛もいた。涙が出て仕方がなかった。何もする気になれなかった。』と涙ぐんで話した』という記述からは[殺処分の予定を知らされないまま突然殺処分になった。処分された牛は出生直後の牛やセリ目前の牛。以後無気力になった]と読み取った。その他の記述を元に、[口蹄疫以降体調不良の夫は、家の奥におり訪問者と合おうとしない][牛を親子一緒に埋却してもらえよう伝えることが、自分にできる精一杯であったという自責の念により感情があふれ出した][ワクチン接種で牛を失い取り戻せない現実と行きどころのない怒りが継続し無念さが残っている]という意味内容を読み取った。

これら5つの意味内容は、口蹄疫発生当時の殺伐とした状況において殺処分という突きつけられた事実に対し、納得のいく処置ができなかった、あるいはしてもらえなかったという自己と他者への複雑な思いが絡み合い感情があふれだしていた。そこで、<1年後にも残る災害の無念さ>というサブカテゴ

リーとした。

以上、4つのサブカテゴリーは、口蹄疫発生から1年後の現在に至るまで時間的な流れの中において、被災農家が口蹄疫をどのように受け止めてきているか様々な思いにおける変化の過程を示していた。そこで、これらを【時間的経過に伴う思いの変化】とカテゴリー化した。

同様に、【再開・廃業を決めた過程と新たな生活の再構築】のカテゴリーは、<再開にあたり収入確保のための働き方の工夫>、<再開・廃業を決定したのは健康・家族・生活の要因>、<再開への希望と期待>、<再開後の仕事の困難さと努力>、<再開の喜びと不安>、<再開後の収入の満足／不満足>、<廃業後の生活>の7つのサブカテゴリーと、18の意味内容から構成された。

【災害時の行政の対応への満足と不満足】のカテゴリーは、<補償金で支えられない1年後の生活>、<補償金に支えられた生活>、<個人がおこなう情報収集の限界>、<行政の災害時の対応に対する継続した怒り・無念>、<行政の災害時の対応に対する昇華>の5つのサブカテゴリーと、17の意味内容から構成された。

【感染予防の重要性の認識と再発を防ぐ徹底した対策】のカテゴリーは、<感染拡大防止のための個人農家の決断と努力の限界>、<再発予防のための行動と様々な思い>の2つのサブカテゴリーと、9つの意味内容から構成された。

【1年後も残る災害の記憶と影響】のカテゴリーは、<口蹄疫発生時のつらい記憶の残存>、<口蹄疫発生と同時に生じた家族状況の変化>、<口蹄疫発生の精神的ストレスによる病気の発生と医療の継続>、<災害後に発見された健康障害とADL低下>、<セルフケアによる回復への努力>、<口蹄疫災害から得た新たな地域の人々とのつながり>の6つのサブカテゴリーと、24の意味内容から構成された。

V. 考察

口蹄疫発生から1年経った現在、現実を受け入れるのが困難であったり、その時のことを教訓として心に残し前向きに考え再開を果たしている被災農家があった。一方、口蹄疫発生によって心身にストレスがかかり睡眠障害で苦しんでいたり、直接的要因でなくても身体疾患を発症してしまったりした被災農家、口蹄疫発生に伴う行政の対応の違いで日々の生活自体が追い込まれたり家畜のために行われていた人との交流が最低限となったりした被災農家などもあった。いずれも、被災農家個々で大きく生活の質が変化していることが確認できた。

本研究では、口蹄疫被災農家の1年後の健康と生活の実態を把握した結果をふまえ、被災農家の思い・身体・社会関係のあり様を、【時間的経過に伴う思いの変化】【再開・廃業を決めた過程と新たな生活の再構築】【災害時の行政の対応への満足と不満足】【感染予防の重要性の認識と再発を防ぐ徹底した対策】【1年後も残る災害の記憶と影響】の順に取り上げて必要な支援について考察する。

【時間的経過に伴う思いの変化】

1年経った今の状態を受け入れることが困難な被災農家の中には、口蹄疫発生当時の混沌とした状況のなかで自分自身の無力さを実感し心の中で折り合いをつけられないでいたり、[口蹄疫発生当時の母牛の難産は獣医の優先順位が低く、自分で対処するしかなく、母牛仔牛ともに助けられず残念]というように折り合いをつけようとしていたりしており、<1年後にも残る被害の無念さ>が感じられた。一方で、災害によって新たな気づきを得て前向きに考える被災農家もあった。このような人々は、[口蹄疫で牛の大切さと問題を乗り越える過程で人とのつながりの大切さを実感した]や[農家にとって生活の一部となっていた家畜の世話は、生活リズムと友人とのつながりを作っていた]、と被災を受けても人との

つながりあるいは自然とのつながりを実感した体験に共通した思いが見られた。林¹⁾は、「市民性が高い（自律・連帯する意識が高い）人の生活復興感が高く、市民性が低い人の生活復興感が低かった」「近所づきあいや地域活動に積極的な人は生活復興感が高く、積極的でない人は生活復興感が低かった」「持ちつ持たれつのか関係を重視する世間志向タイプの人の生活復興感が高く、個人分離のか関係を重視する社会志向タイプの人の生活復興感が低かった」ことを調査で明らかにしている。これらは、同じ時間的経過をたどっても、自ら人との交流を築く力の強弱により、災害の乗り越え方に違いがあることを示しており、このことは本研究結果からも同様であることが確認できた。

また、[敷地の入口から見えて後ろに豚舎がある場所に畜魂慰霊碑を設置している]や[口蹄疫発生から当時の殺処分や新しい牛の導入、消毒についての記録を継続することで、災害を忘れてはいけないという気持ちで生活している]というように<災害の痛みを心に刻む>ことをしながら生活している現状があった。平野²⁾は、「中越地震被災者は、体験を否定して受け入れられない段階→体験に積極的な意味を見い出して受け入れのための努力をする段階→積極的な意味を見い出し、さらに震災前の生活に戻って復興途上の段階、という3段階を経て、その段階毎に生活復興感が高まるのである」と述べているように、被災の種類は違っても災害の体験を受け入れ意味を見いだすということが復興には必要であることが分かる。

これらのことから、平常時から人との交流を深める場の提供や絆を強化できるような支援が必要であること、また、災害後には、体験を語り合う場の設定などの支援が必要であると考えられる。

【再開・廃業を決めた過程と新たな生活の再構築】

再開するにあたって畜産を拡大する農家がある一方で廃業となった農家もあった。畜産再開の背景には、[大規模農家は親から引き継いでいくので家族の合意で再開を決めた]や[再開するかどうかは費用の問題だけでなく後継者の有無も影響した]ように後継者の存在が大きかった。さらに、[補償金を使って肥育から夢だった牛の繁殖に切り替え再開した]や[良い牛を飼って一番になれる夢をもって牛を飼って生活している]といった夢を描き実行した農家があった。しかし[再開しても家畜が成長して出荷まで時間かかるため収入面では不満足の状態]や[子供が後継してくれて嬉しいという気持ちと、娘に再び同じような辛い経験をさせるのではないかと不安が交錯している]とあり、経済の安定には時間がかかったり再開の葛藤が生じたりするようである。それら不安や葛藤が生じるのは、将来の希望や夢を持ちそれを支える家族の存在が後押ししてくれるという『家族のつながり』が共通して存在しているといえるのではないかと考える。林³⁾は、「家族間の心理的な結びつき（きずな）の距離が遠い（バラバラ）人の生活復興感が低かった」「家族関係のかじとり（リーダーシップ）について、中庸なバランスの取れた（きっちり・柔軟）人は生活復興感が高かった」と報告している。つまり、家族のつながりが強ければ強いほど生活の立て直しには優位であることが分かる。本研究でも、家族のあり方、つまり社会関係が再開に影響したと考える。

これらのことから、災害復興に向けて支援者は家族背景や家族関係を把握したうえで支援の方向性や支援の優先順位を定めていくことが必要であると考えられる。

【災害時の行政の対応への満足と不満足】

行政の対応では、被災直後の対応と補償金による対応が被災農家の生活に影響していた。<保証金で支えられない1年後の生活>では[豚の預託農家であり、補償金がゼロで経済的にも困窮]、[豚の補償金は安いので殺処分までの光熱費と飼育費で補償金を使い果たし、生活は補償されなかった]があった。

保証金は、当時の家畜の評価額を家畜所有者に支払われたので、家畜は所有せずに飼育だけをする預託農家は保証金を受け取ることができず生活に困窮した。また、口蹄疫発生後から家畜を売りに出せずに収入が途絶え、ワクチン接種後から殺処分までの畜舎の管理に必要な光熱費、エサ代と出費だけがかさんでいた。補償金がない預託農家や殺処分までに使われた経費は考慮されておらず、特に補償額が安い豚を飼う農家は生活が脅かされていた。このように経営形態の状況の違いが農家の様々生活状況を生み出していた。

〈個人がおこなう情報収集の限界〉では〔口蹄疫の情報収集をインターネットや買い物時に個人でおこなおうと思ったが不十分であった〕、〔口蹄疫発生時は、個人で友人・知人から情報収集をしたため、通信費がかさんだ〕、〔発生源がわからないと、専門機関で学んだ知識が生かされない〕があった。様々な情報が乱れ飛ぶことで混乱を招くことがあるが、当時の行政の情報公開と被災農家が必要とする情報には大きなズレがあったことがわかった。〔主要道路の通行止めは、車の消毒に協力しない一般の人の迂回走行となり、感染予防に対する行政の対応のまずさに無念な気持ちをもっている〕とあるように、行政と被災農家の間だけの問題ではなく、一般市民が感染の媒体になることを防ぐために、一般市民に対して行政の対応の意図や知識の周知、さらには被災地農家の心情が伝わる情報の提供も重要であることがいえる。

今回の住民の声から、経営形態や畜産の種類、補償額の違いが1年後の生活に影響していることがわかった。また、災害時には正確な情報の伝達が最も高いニーズであることが確認できた。このことは口蹄疫以外の災害でも同様のことがいえる。様々の災害が継続して発生している昨今の現状の中で、改めて危機管理や災害支援の重要性が叫ばれ、行政に期待される役割は大きくなっている。情報発信の方法、関係機関との連携の有りかたなど、口蹄疫発生当時の活動を検証し危機管理体制構築に役立てていくことが重要であると考ええる。

【感染予防の重要性の認識と再発を防ぐ徹底した対策】

口蹄疫終息後1年経過した現在、再開農家では〔口蹄疫終息後も、来訪者への気遣いとストレスを感じながら、消毒に気をつけて生活している〕、〔畜産を再開していることにより、現在も感染を防ぐための消毒や侵入制限がおこなわれている〕、〔牛好きで牛を見に来ていた近所の子供も感染予防のため牛舎には入れられない〕、〔口蹄疫発生前は近所の仲間で互いに直接接触しながら、相談や手伝いをしていたが、現在は感染予防を考え互いに牛舎には近寄らない〕など、感染拡大防止や再発防止に取り組んでいた。二度と口蹄疫を発生させてはならないという農家の強い信念を感じ取ることができる。しかし、一方、これらは、日常的に交わされていた近隣との交流を制限することにつながり、社会生活の規制を強いられ継続されていることが分かる。先に述べた市民性と生活復興感の関係性の高さから考えると、近隣住民との希薄となった制限された生活は今後の生活復興に大きく影響を及ぼすことが考えられる。感染予防と解放された近隣との交流のあり方を、いかに両立していけるか、畜産関係者からの助言も受けながら考えていくことが必要である。

【1年後も残る災害の記憶と影響】

復興への思いや家族の支えはあっても、口蹄疫発生に伴う心身の乱れに注目せざるを得ない状況に追い込まれる農家もあった。今回の訪問で〔精神的なストレスによる免疫力低下やその他の要因が加わったことにより病気を発症し、現在も通院している〕、〔口蹄疫により精神的落ち込み、現在も病院に通院している〕、〔殺処分による精神的ストレスや不眠、多忙な生活が重なり、夫が倒れ入院し、妻も2回入

院した]などがあつた。これらは、口蹄疫が直接的な原因で発症したとは言えないが、口蹄疫に関連するストレスが食生活や睡眠に影響したことで身体内部環境の乱れが生じていくプロセスが想像できる。つまり、心の乱れを起点として基本的ニーズが満たされずセルフケアにも影響し免疫機能を低下させ健康障害に至る方向へ発展したと考えられる。川田・近澤・玉木⁴⁾らは被災した人々への災害後早期からの心のケアの有効性についてその重要性を述べており、被災後早期からの心のケアは日常生活を整える上でも必要なケアであると言える。つまり、被災者の回復過程を促進するためには、今後も心と身体の乱れる可能性を予測しながらのケアが求められると考える。

また心のケアを必要とするのは、被災農家だけではないことが今回の研究で明らかとなった。[口蹄疫発生当時は疲労もピークで周囲の目を気にしながら、また家族員も社会のつながりの中で批判を受けながら生活していた]、[口蹄疫で一番つらかったのは、支援金の配布の役割で、金額による畜産農家からの不満があつたときである]、[口蹄疫のときは、畜産業の指導的立場にあつたため、昼夜を問わず自宅や携帯に相談の電話があり、睡眠時間を削りその対応をした]と1年たった今も口蹄疫発生時のつらい記憶が残っている、被災農家に直接対応を迫られる立場にある人々がいた。指導的立場にある組合職員や行政などは、情報収集や地域住民の生活の生命線であるため、多くのストレスを抱えながらも職務の遂行を第一に活動していたことが分かる。災害時も災害後も、これら被災者を支える方々の健康状態や心の状態を注意深く見守り、ケアを行っていくことが重要であると考えられる。

VI. おわりに

口蹄疫被災農家の1年後の健康と生活実態を把握するために訪問した結果、様々な健康や生活実態が明らかとなった。災害を乗り越えるためには平常時からの供えや危機管理体制構築が重要になるといわれている。今後は、現場の保健師とともに、今回把握した貴重な住民の声や生活実態を元に、災害復興を支援する活動や地域での危機管理体制の構築に取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) 林春男：阪神・淡路大震災からの生活復興 2005—生活復興調査結果報告書—，102-106
- 2) 平野順子：中越地震被災者の生活復興過程と生活復興感， 地域研究 ， 第18号， 117
- 3) 前掲書1)：104
- 4) 川田美和，近澤範子，玉木敦子，立垣祐子，原田奈津子：被災した人々への災害後早期からの『心のケア』—避難所における看護職者の実践体験をもとに—，日本災害看護学会誌，11(2)，31-42，2009
- 5) 前掲書4)：36

表1 口蹄疫被災農家の1年後の健康と生活実態についての分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	カードから抽出した意味内容
時間的経過に伴う思いの変化	災害の痛みを心に刻む	敷地の入口から見えて後ろに豚舎がある場所に「畜魂慰霊碑」を設置している
		口蹄疫発生から当時の殺処分や新しい牛の導入、消毒についての記録を継続することで、災害を忘れてはいけないという気持ちで生活している
	災害によってもたらされた新たな気づきと蓄えられた力	口蹄疫で牛の大切さと問題を乗り越える過程で人とのつながりの大切さを実感した
		生活の一部となっていた家畜の世話は、生活のリズムと友人とのつながりを作っていた
		一年たった今、ほかの地域での災害を想定し、口蹄疫の経験を活かして、他者へも力を差しだし、頑張れる自信と期待がある
	被災から1年後にも続く整理がつけられない心	家畜の価値は、その排泄物にもあり自然とのつながりの中で生活している
		口蹄疫の加害者でもあり、被害者でもあるという2つの思いがあり、他者の理解を求めている
		畜産を子供に譲ったことにより、趣味を模索しているがまだ気持ちが新たな趣味に向かわない状態
	1年後にも残る災害の無念さ	畜産を再開にあたって、子供へゆずり一線を退いた。今はすることがなくどう過ごしていけばいいかわからなくなった
		口蹄疫発生当時の母牛の難産は獣医の優先順位が低く、自分で対処するしかなく、母牛仔牛ともに助けられず残念
		殺処分の予定を知らされないまま突然殺処分になった。処分された牛は出生直後の牛やセリ目の牛。以後無気力になった。
		口蹄疫以降体調不良の夫は、家の奥におり訪問者と合おうとしない
牛を親子一緒に埋却してもらえるよう伝えることが、自分にできる精一杯であったという自責の念により感情があふれ出した		
	ワクチン接種で牛を失い取り戻せない現実と行きどころのない怒りが継続し無念さが残っている	
再開・廃業を決めた過程と新たな生活の再構築	再開にあたり収入確保のための働き方の工夫	1年経った今は臨時職と繁殖農家を営んでいる
	再開・廃業を決めたのは健康・家族・生活の要因	殺処分により、畜産による収入がない状態を埋めるため、農業を拡大し多忙。農業による収入を期待している
		再開は難しいと思い、職探しをしていたが、壮年期の正職探しは難しい。畜産による借金や3世代家族の生活費のためにも養豚で収入を得ていくと決意
		大規模農家は、親から引き継いでいくので、家族の合意で再開を決めた
		再開の有無は費用の問題だけでなく後継者の有無も影響した
	再開への希望と期待	健康障害をもった子供と二人暮らし。畜産再開は、家族の支えが得られないので無理。この先どうすれば良いのか答えは出ない
		農場主に健康障害が見つかり、断念廃業した
	再開後の仕事の困難さと努力	補償金を使って夢だった牛の繁殖に切り替え再開した
		良い牛を飼って一番になれる夢をもって牛を飼い生活している
	再開後の収入の満足／不満足	口蹄疫再発の不安や、慣れない牛の飼育に疑問もあるが、今後肥育も再開していきたいという意欲もある
		酪農休止中に体力が落ちたため、仕事量は軽減したが時間がかかる
	再開の喜びと不安	殺処分前の優秀な牛と新たに飼った牛との違いを感じながら身体を張って再開している
子供が後継し嬉しいという気持ちと、再び同じような辛い経験をさせるのではないかと不安が交錯している		
再開後の収入の満足／不満足	再開しても家畜が成長して出荷まで時間がかかるため、収入面では不満足の状態	
	畜産により収入を得るには1年弱かかるので、好きな牛の成長を楽しみに年金で慎ましく暮らす	
廃業によりもたらされた有意義な交流	殺処分後は時間的余裕があり、家族や仲間と交流をもつことができた	
	家畜の世話をするという役割がなくなり家族だけの自由な時間と考えると旅行した	
	廃業により、新たにグランドゴルフに参加し、生活を送っている	

災害時の行政への対応への満足と不満足	補償金で支えられない1年後の生活	豚の預託農家であり、補償金がゼロで経済的にも困窮	
		豚の補償金は安いので殺処分までの光熱費と飼育費で補償金を使い果たし、生活は補償されなかった	
		家畜を見ることに精神的苦痛を感じるようになった子供と同居を解消。子供の仕事もないため経済的に大変な状態である	
	補償金に支えられた生活	保証金で仲間とストレス解消の機会が持てた	
		十分な補償金で生活と心にゆとりができた	
		補償金によって、畜産や生活を立て直し、現在は生活できている 補償金を使って肥育から夢だった牛の繁殖に切り替えられた	
	個人がおこなう情報収集の限界	口蹄疫の情報収集をインターネットや買い物時に個人でおこなおうと思ったが不十分であった	
		口蹄疫発生時は、個人で友人・知人から情報収集をしたため、通信費がかさんだ 発生源が分からないと、専門機関で学んだ知識が生かされない	
	行政の災害時の対応に対する継続した怒り・無念	牛は家族という思いを理解しない行政への怒りが込み上げている	
		主要道路の通行止めは、車の消毒に協力しない一般の人の迂回走行となり、感染予防に対する行政の対応のまずさに無念な気持ちをもっている	
		行政は畜産農家の気持ちや口蹄疫について理解していないという怒りが現在も継続したまま生活をしている 災害発生時の対応が遅かったことに不満が残り、行政の人を見ると怒りを表現せずにはおれない生活を継続している	
	行政の災害時の対応に対する昇華	行政への不満はあるが、表現しても起こった事実は変わらないので、一年経過した今は再建に向けて頑張るだけ	
		口蹄疫発生時、行政の対応に不満があったが、行政の対応の内容を知ることによって不満は軽減した 口蹄疫の補償は畜産の補償であり、生活を補償されるか不安を抱えていた住民が気持ちを表現し、行政のトップが解決した	
	感染予防の重要性の認識と再発を防ぐ徹底した対策	感染拡大防止のための個人農家の決断と努力の限界	徹底された感染予防が行われている農場にも口蹄疫が感染した。個人の畜産農家で感染の侵入を防ぐのは難しい
			畜産は生計を営むための手段と捉え、感染拡大を予防するために殺処分を受け入れることができた
再発予防のための行動と様々な思い		口蹄疫終息後も、来訪者への気遣いとストレスを感じながら、消毒に気をつけて生活している	
		畜産を再開していることにより、現在も感染を防ぐための消毒や侵入制限がおこなわれている	
		口蹄疫終息後も自宅に消毒場所の設置や立ち入り制限の表示をして感染に配慮して生活している	
		口蹄疫再発防止のため消毒槽、消毒剤、進入制限の対策が個人でも継続して行われている	
		再開の目途はたたないが、玄関ぎりぎりまで消毒剤をまき、敷地内に侵入制限のくさりと表示をして生活している	
		牛好きで牛を見に来ていた近所の子供も感染予防のため牛舎には入れられない 口蹄疫発生前は近所の仲間と互いに直接触れながら、相談や手伝いをしていたが、現在は感染予防を考え互いに牛舎には近寄らない	
1年後も残る災害の記憶と影響	口蹄疫発生時のつらい記憶の残存	口蹄疫感染拡大予防のための移動制限により、日常生活が制限されたことは苦痛であった	
		口蹄疫発生当時は疲労もピークで周囲の目を気にしながら、また家族員も社会のつながりの中で批判を受けながら生活していた	
		補償金の問題や仕事の再開を考えられないときが一番つらかった	
		口蹄疫で一番つらかったのは、支援金の配布の役割で、金額による畜産農家からの不満があったときである	
	口蹄疫発生と同時に生じた家族状況の変化	口蹄疫のときは、畜産業の指導的立場にあったため、昼夜を問わず自宅や携帯に相談の電話があり、睡眠時間を削りその対応をした	
		畜産の後継ぎのために、子供と同居を始めた矢先の口蹄疫災害だった	
		殺処分がきっかけで家庭内のもめ事がおこり子供が父親に距離をとりながら生活している	
		口蹄疫発生時に家族に不治の病が見つかり、他界した。生活の中から仕事も家族も失った。 口蹄疫以外の変化で家族への負担は重なっていた	

		妻は夫の入院により、畜産に対する責任をひとりでもつ生活となったため、介護と仕事で毎日の生活を必死に送っている
		生活のわずかな楽しみは、季節の仕事で家族が集まること。日々の生活は何とか過ごしている
		心配した子供が昼食を食べにきてくれたので、子供との時間が増え食事を作り食べるのが充実した
口蹄疫発生による精神的ストレスによる病気の発生と医療の継続		精神的なストレスによる免疫力低下やその他の要因が加わったことにより病気を発症し、現在も通院している
		口蹄疫により精神的落ち込み、現在も病院に通院している
		不眠となり、かかりつけ医で睡眠薬を処方されている
		口蹄疫発生当時から睡眠導入が困難であり、現在も安定剤を服用している
		不眠となったため医療の力を借りて生活している
口蹄疫発生後に発見された健康障害とADL低下		殺処分による精神的ストレスや不眠、多忙な生活が重なり夫が倒れ入院し、妻も2回入院した
		口蹄疫が落ち着いてから身体の不調を感じて病院を受診し健康障害が見つかって手術となった
		汚れた肌着姿、電話の音が鳴っている間に電話にでられないほどのADL低下のある農場主がいた
		仕事が変わって家事・介護に手が回らなくなった家族。同居の父の食事世話が十分できず父のやせが目立ち、ADLも低下
セルフケアによる回復への努力		口蹄疫発生により精神的ダメージを受け体調を崩したが、セルフケアにより徐々に回復している
口蹄疫災害から得た新たな地域の人々とのつながり		口蹄疫災害は畜産農家の当事者だけではなく、周りの人も精力的に一体となって活動した
		口蹄疫のときは、畜産業の指導的立場にあったため相談を受ける立場が続いている